世界の人々との交流の拡大

平和の茶がつなぐ韓国との絆

～朝鮮通信使記念茶会～

世界の人々との交流拡大を目指し、地域外交の深化や通商の促進、国際競争力の高い観光地域づくりを進める静岡県。今回は、今年で6回目を迎えた朝鮮通信使記念茶会の様子や茶会がつなぐ韓国との交流について紹介する。

朝鮮通信使と清見寺

朝鮮通信使とは、豊臣秀吉の朝鮮出兵で断絶した日本と朝鮮王朝の国交回復を目指し、江戸時代、朝鮮王朝から幕府に派遣された外交使節のことだ。使節団は朝鮮国王の親書を携え、正使をはじめ学者や一流の文化人など総勢およそ500人が半年から1年近くの日数をかけて漢城（現在のソウル）と江戸を往復した。1607年から1811年までに12回日本を訪れ、道中各地での学問や文化の交流を通して、両国の友好発展に寄与してきた。江戸時代が、「パクス・トクガワーナ」とも称される、250年以上に及ぶ世界でも稀な平和な時代を保つこととなった一因と言える。

朝鮮通信使の歴史的意義は世界的にも高い。朝鮮通信使が残したとされる資料が、日韓両国に合計111件、333点現存する。これらは、後世に残す価値のある歴史的重要資料であるとして、日韓両国の民間団体が共同で申請し、平成29年、ユネスコ（国連教育科学文化機関）の「世界の記憶（通称：世界記憶遺産）」に登録された。

この資料のうち、奈良時代に創建されたと伝わる名刹で、国の史跡、名勝にも指定されている清見寺（静岡市清水区）には、「朝鮮通信使詩書（しょ）」など国内最多の48点が保存されている。

清見寺は、徳川家とのつながりも深い。第1回の朝鮮通信使が来日した際、大御所として駿府城に居を構えた家康公は、江戸からの帰路にあった使節団を清見寺に宿泊させ、駿府城で歓待したとされる。6月20日（旧暦）のことである。

未来志向で語る平和の茶会

こうした歴史的背景を顧みれば、本県は日韓平和外交の象徴の地であると言えよう。このため、県では、6月20日を朝鮮通信使の記念日とし、清見寺に韓国の要人を迎えて「朝鮮通信使記念茶会」を平成26年から毎年開催している。

往時をしのび、静岡から現代の平和をつくるべく開催するこの茶会の趣旨に賛同を得て、これまでも多くの方にこの茶会へ参加いただいている（別表）。

今年も6月20日、茶道裏千家の協力を得て、川勝知事が南官杓（ナムクァンピョ）駐日韓国大使、張済国（チャンジェグク）東西大学総長、李明烈（イミョンヨル）駐横浜韓国総領事、徳川家広徳川宗家（公財）徳川記念財団副理事長）を清見寺に招き、茶会を開催した。

南官杓駐日韓国大使は5月に着任したばかりであったが、この茶会の意義や本県が推進する地域外交の理念に共鳴し、最初の地方公務先として本県を訪れた。

南大使は「現在、日本と韓国の関係は厳しい状況であるが、この茶会を通して新たな日韓関係をつくるきっかけにしたい。朝鮮通信使と同じように、私たちも400年後の記憶に残る日韓関係を築いていきたい」と述べている。

また、朝鮮通信使が世界記憶遺産に登録されるにあたり、韓国側の推進委員長を務めた張東西大学総長は、「私たちは現代の朝鮮通信使である。このような時期だからこそ、文化や人的交流を続けなければならない」と話し、知事も「不幸な記憶を乗り越えるため、家康公は朝鮮通信使を静岡に迎え250年にも及ぶ平和な時

長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵「朝鮮国信使絵巻（文化度）」

令和元年の茶会。南駐日韓国大使は、着任後最初の地方公務先として本県を訪れ、茶会に出席。

これまでの「朝鮮通信使記念茶会」出席者

年	客人	亭主
平成26年	イ・スジョン ・李壽尊 駐横浜韓国総領事 ・徳川恒孝 徳川宗家（第18代当主）	・千玄室 裏千家大宗匠 ・知事
平成27年	ジュ・ジュンチョル ・朱重徹 駐横浜韓国総領事 ・徳川恒孝 徳川宗家（第18代当主）	・千玄室 裏千家大宗匠 ・知事
平成28年	ジュ・ジュンチョル ・朱重徹 駐横浜韓国総領事 ・徳川恒孝 徳川宗家（第18代当主）	・後藤宗国 裏千家業躰 ・知事
平成29年	イ・ジュンギュ ・李俊揆 駐日韓国大使 ・徳川恒孝 徳川宗家（第18代当主）	・千玄室 裏千家大宗匠 ・知事
平成30年	イ・ワング ・李完九 韓国元国務総理（元忠清南道知事） イ・ミョンヨル ・李明烈 駐横浜韓国総領事 ・徳川家広（（公財）徳川記念財団副理事長）	・倉斗宗覚 裏千家業躰 ・知事

役職は茶会当時

代の基礎を築いた。その往時をしのび、本県から現代の平和をつくりたい」と、茶会がもたらす可能性を未来志向で語っている。

茶碗に込めた友情と願い

過去から未来へ平和を紡ぐこの茶会において、茶道裏千家の存在は欠かせない。中でも、茶道裏千家第15代家元の千玄室氏は「一盌からピースフルネスを」という理念で世界60数ケ国をまわり、世界の平和に貢献してきた大茶人だ。日本初の日本・国連親善大使として「茶道外交」を展開し、茶の心を通じて異なる文化であっても互いを認め、分かり合える「接点」を見出し、平和な世界を創り出す活動を続けている。その千氏がこの茶会の意義に共鳴し、知事とともに客人をお迎えする「亭主」としてこの茶会に臨まれている。特に平成29年の茶会で使用され、茶会の後に千氏から知事へ贈られた茶碗、銘「富士山」は、その象徴として意義深い。

千氏によると、銘「富士山」は、豊臣秀吉の朝鮮出兵で断絶していた朝鮮王朝との国交を正常化するために来日した朝鮮王朝の協議使節団を、家康公がもてなした茶会で使用されたものを再現した茶碗である。朝鮮通信使の歴史を静かに物語るこの茶碗を通じて、日韓の新たな関係構築を願う千氏の心が込められている。茶碗は現在、島田市の「ふじのくに茶の都ミュージアム」で鑑賞することができる。

地域外交の精神 国内外から注目

県は、「人をつくり、富をつくり、平和を築く地域外交の展開」を交流の基本方針に掲げ、韓国をはじめとした様々な国・地域と積極的に地域間交流を進めている。中でも韓国との交流は、県が進める「地域外交」への期待が大きい。

この茶会を通じて親交を深めた大使館、領事館と連携し朝鮮通信使の意義を広め、将来の日韓両国の架け橋となる青少年交流に力を入れている。

韓国・忠清南道との友好協定締結5周年を迎えた平成30年6月、静岡県立大学で日韓の大学院生が研究発表を行う「日韓次世代学術フォーラム」が開催された。この中で、県内NPO団体の協力により、朝鮮通信使の再現行列を披露し好評を得た。

また、朝鮮通信使が辿ったソウル～東京間を、海路と陸路で踏破する民間団体による交流イベント「21世紀の朝鮮通信使友情ウォーク」も応援している。7回目となった今年5月も両国の民間団体は県庁や清見寺を訪問し、「朝鮮通信使が辿った道を平和が息づく道にしたい」と、末永い友情を誓い合った。

世界記憶遺産にも登録されている「朝鮮通信使」。その歴史的な意義を踏まえ、茶会を通じて本県から平和を築いていく取り組みは、輝きを放ち、国内外の注目を集めている。

平成29年茶会。
千玄室氏から知事へ銘「富士山」が贈られた。

千氏から知事へ贈られた、銘「富士山」。

平成26年茶会。
千玄室氏から御点前の手ほどきを受ける川勝知事。

平成27年茶会。
清見寺所蔵の朝鮮通信使関連の資料を鑑賞する出席者。

平成28年茶会。
茶器の説明を熱心に聞く徳川恒孝氏。

平成30年茶会。
郷土史家から朝鮮通信使関連の資料の説明を受ける李完九氏ら。

一盌からピースフルネスを

千 玄室 ～記念茶会特集に寄せて～

わが国は、隣国の朝鮮や中国と交流を行うことで、生活文化や律令制度を取り入れ、国としての構造を築いてきました。630年から894年までは、15回にわたって唐へ遣唐使を派遣しています。その後、応永8（1401）年に足利義満が朝鮮と外交交隣関係を開いてから明治維新に至るまで、両国は基本的に交隣友好の関係を維持しました。その具現化が国書の交換であり、そのために朝鮮通信使も生まれたのです。

通信使一行の宿泊饗応は、全て日本側の負担でした。陸路道中ではさまざまな「もてなし」がありました。近江の儒者雨森芳州が通訳をしたことはよく知られています。朝鮮も通信使派遣により日本の国内の情勢をこまかく観察、いわば偵察できるという目的もあったようです。これらの記録は朝鮮側に残され、近世日本の動向が示された貴重な記録となっています。

豊臣秀吉の弟・秀長と親交のあった千利休は、秀吉の朝鮮侵略を何度も止めようとしますが、結局は石田三成や小西行長らの侵攻派に謀られ、切腹を命じられてしまいました。

一方、徳川家康は秀吉と異なり、中国（明）や朝鮮と平和国交を回復することに熱心であり、1604年に朝鮮から松雲大師ら一行が日本を訪問した際、京都での2代将軍秀忠との会見ののち、大徳寺で茶道などの饗応をしていています。このように隣国同士が手を握り合うことが、両国の賢人により実現されたことを現代も見習うべきではないでしょうか。

両国の心ある人々により、朝鮮通信使の関連資料がユネスコの「世界の記憶」に登録されたことは、私もユネスコ親善大使として、また日本人として喜ばしいことであります。

川勝静岡県知事は、朝鮮通信使が徳川将軍に謁見するため、静岡の名刹・清見寺に滞在したときの「もてなし」を再現しようとされ、私も協力させていただいています。その席で私は、駐日韓国大使、徳川宗家、川勝知事の御三方にお茶を差し上げました。正に今日の日韓の友和と真の交流を一盌のお茶によって催すことができました。誠に嬉しく、有り難いことと思います。この茶会は平成26年から毎年6月に催されております。京都の二条城や大徳寺での茶会の記録などから、お土産はお茶碗を贈ったとあります。恐らくそのお茶碗は、道中から見た富士山の絵が描かれた京焼であったと思います。そのような気持ちで昔を再現し、茶碗を川勝知事や韓国大使に贈らせていただきました。これも今後の歴史の一頁を飾ることとなりましょう。

静岡県が朝鮮通信使の歴史とその持つ意味の重要性を鑑みながら、平和の茶会を続け、日韓両国の親善交流の大きな柱となるよう望んでおります。徳川家康の地である静岡が銘茶とともに、茶の3つの大きな効力（一）主客同一、（二）勧め合い、互いに尊敬しあう心、（三）平和に寄与する、という3点を世に示していこうではありませんか。期待してやまない次第であります。

茶道裏千家大宗匠 千 玄室氏

大正12年、京都府生まれ。昭和39年、裏千家第15代家元となり宗室を襲名。平成14年、家元を譲座し、千玄室大宗匠に。「一盌からピースフルネスを」の理念で、道・学・実をもって世界60数か国を300回以上歴訪。茶道文化の浸透・発展、世界平和の実現に向けて活動を展開。現在、外務省参与、ユネスコ親善大使、日本・国連親善大使など100以上の公職、役職を持つ。紫綬褒章、藍綬褒章、文化勲章等の受章に加え、レジオン・ドヌール勲章オフィシエ（仏）、大功労十字章（独）等、海外勲章の受章も多数。